

Good Job
グッドジョブ!!

現場で働くプロに聞く!!

葬儀業

funeral director



名前

かわばた やすたか

川端 康誉 さん (宮園)

社名

(有)葬祭公社 斎場 益城会館

職歴

12 年

冠婚葬祭の「葬」にあたり、人々の生活に深く関係する場所である斎場。だが葬儀以外で足を運ぶことはあまりない。(有)葬祭公社の川端康誉さんは、そんな日常的には縁遠い斎場という場所でも働くスタッフ。今回は葬儀業について伺った。

手伝いから家業の葬儀業へ

葬式をする場所といえ、近年では斎場を思い浮かべる人が多いと思うが、川端さんが学生の頃は「家で行う葬儀」が主流だった。

「実家が葬儀業だったので、学生の頃に時々手伝いをしていました」

実家が葬儀業を営む川端さんは、葬儀を行う家に祭壇やテントを持ち込み、設営するという、今では珍しい作業を手伝っていた。

「社会人になってしばらく外で仕事をしていたんですが、斎場ができたことを契機に家業の葬儀業に携わることになりました」

非日常な印象がある葬儀業だが、学生時代の経験もあって、抵抗なく葬儀社のスタッフとなった。

遺族が集中できる式を

遺族やその親しい間柄の人など、傷心している人たちを前に仕事をしなければならぬ職業だけに、常に平静を保つよう心掛けて

いるそうだ。

「遺族がご遺体と共に過ごせる時間は明らかに葬儀まで。その限りある時間に集中できる環境を整えるには、どうサポートすればいいのかわからない。何を手伝えることができるか。そこにやりがいがあると私は思いますね。」

色々な面から物事を見る

短期間で執り行われる葬儀では「こうしなければならぬ」という個人個人の思い込みが、もめごとの原因になることもあるそうだ。

「情報がたくさんある世の中です。インターネットや本に『こうすればいい』と書かれていれば、みんなそれを信じます。その方法をするかしらぬか、ではなく『どういう理由でするのか』ということが大切。それが宗教的な面、社会的な面から見て問題がないか、ご遺族と一緒に考える作業が大変難しいですね」

最近「終活」という言葉もあるように、川端さんも葬儀の事前相談を勧めている。「逝く人も残される人もそれぞれ葬儀に対する要望があるとします。元氣なうちに要望のすり合わせをしておくことが大切ですね」



▶(左写真) 集会場やお寺に呼ばれて葬式の講話も行う。県外に行くこともあり、遠くは北海道まで行ったことも。

▶(右写真) 映画「おくりびと」で一躍有名になった納棺士から、納棺される川端さん。「実際にやってみないと人に勧められない」ということで納棺を体験してみたそうだ。